

## 我孫子景観基礎研究3 その1：身近なデザインの潮流と都市景観のつながり-5

野口 修(建築家・工学博士)

## 5-1. 福岡市／大博通りのヤシの木

先日、本会の方々と会食した際、景観基礎研究2(第112~114号)は、「もっと書けたのではないか?」との御指摘を頂いた。街路樹と景観、都市デザインの関係をテーマとした同論では、まず街路樹の起源を探り、日本における『近代街路樹発祥地』と称する横浜市の馬車道通りを訪ね、そこから同市のMM21地区、仙台市、京都市、東京の神宮外苑で起こっていることを取り上げ、景観教育の大切さと「手賀沼の又マベ」について論じた。そして、最後に東京駅周辺を街歩きし、都市緑化の現況と今後の展望を述べた。

この“街歩き”ではまず、都心に対する行政の整備方針として、建築の高層化で役割が縮小した街路樹より、直接日差しを受けるビルの屋上や壁面の緑化に力を入れ始めている現況を示した。また、街路樹が低木化していることも合わせて、未来の「街路景観」は行政主体の街路樹より、民間が主体となる敷地内緑化や建物の屋上緑化、壁面緑化の在り方が創ることになるとまとめた。

一通り書いた気になっていたが、東京圏以外の現況も伝えていたのか気になって、地方都市の街路樹や緑化について考えてみた。まずは最近、通い始めた九州の福岡市について書いてみたい。

福岡市の都市計画は那珂川を挟んで、福岡城の城下町として栄えた西の福岡と、博多港を中心に商人町として栄えた東の博多が対峙する構図が原型となっている。1876(明治9年)に統合されて最終的には福岡市になった。



図1：福岡市市街地の地図

※本論で取上げる場所の位置関係を記載



写真1：博多駅から見た大博通りと博多駅前の緑化状況

福岡市は、九州唯一の100万都市で、現在の人口は約166万人(2025年)となっている。福岡空港と博多駅が地下鉄で約6分の所要時間で結ばれ、ほとんどストレス無く行き来できる。

通い始めなので、まずは、博多駅前の街路、大博(たいはく)通りについて調べてみた。すると、博多駅と博多港を結ぶ大博通りのほぼ中間地点より海側の中央分離帯に“ヤシの木”が植えられていることを知った。

このヤシの木、樹種としては、ワシントニアパームということだ。ざっと調べたところでは、何時、どのような目的で植えられたか不明という。日本にヤシの木が持ち込まれたのは、鎖国下に海外との交易を続けていた長崎が最初という説がある。グラバー園や浦上天主堂などの庭にもそれらしい木が植わっているが、詳細は不明だ。



写真2：呉服町辺りから海側に向けて中央分離帯がヤシの木に変わる



写真3：水道局に分岐する街路にはイチヨウ、歩道にはホルトノキが植えられている

街路樹としては、宮崎県で「観光宮崎の父」と称された宮崎交通創業者の岩切章太郎が、南国リゾートの演出を目的にワシントニアパームを持ち込んだことが知られている。1960年代の新婚旅行ブームに乗じたこの観光戦略は見事に的中し、同様の気候と美しい海岸線を持つ近県でも取り入れられた。このことから日本では“南国”のイメージが定着しているが、実際のワシントニアパームは北米由来の樹木で、寒さにも強い。

九州地方でなくても、千葉県の海岸線などで見ることができる。ここで着目すべきは、ワシントニアパームが一般的な街路樹の範疇を越え、南国イメージの象徴として「宮崎県全体の景観デザイン」に影響力を持った点で、神宮外苑のイチヨウ並木のような「観光スポット」とはスケール感が異なる。結局、宮崎県での成功は、岩切氏の強力なリーダーシップによるところが大きく、福岡市の大博通りも含む、その他多くの事例が「何故、ヤシの木を植えたのか？」と、後世に“謎”を残すことが多い。

淡路島でも昭和30年代、宮崎県に倣って『淡路島全島亜熱帯植物園構想』という計画があったようで、ヤシの木、ブーゲンビリア、グアバなどの植物を全島に栽培・植樹したらしい。島の玄関口は異国情緒を高めた南国のイメージで、日が昇る東海岸には亜熱帯植物を多く使い、西海岸には松、梅、椿など日本的な雰囲気のあるものをと、島全体の植栽をデザインしていたようだ。

その後立ち消えて、現在では「何故、ヤシの木を植えたのか？」整備している国道事務所も詳細を知らない“謎”になったらしい。

これは筆者の想像だが、島の景観デザインは観光戦略とも直結することから、功罪を気にする首長が変わった段階で前任者の案は一新され、中途半端な状態で残されたのではないかと。

## 5-2.福岡市の緑化計画

福岡市の街路樹を調べはじめて知ったことだが、現在、福岡市役所本庁舎を1万本の植栽で緑化する“天神の森”プロジェクトが進んでいるらしい。福岡市役所は、環境建築家とも称されるエミリオ・アンバースが設計に参加したアクロス福岡と近く、公開されたパースの通り緑化されれば、福岡市街の天神に結構なスケールの“森”ができるのではないかと考えた。今年の7月に公募で事業者が選定され、来年3月には工事が完成するとのことだ。



写真4：雑壇状の建物が植物で覆われたアクロス福岡



写真5：福岡市役所本庁舎と、地下鉄空港線の緑化イメージパース。総事業費は本庁舎が約3億4500万円、地下鉄各駅が計約2億9500万円

太宰府天満宮仮殿もそうだが、昨今の福岡市周辺は、建築緑化の話題が多い。そして今回、既存建築を緑化する市役所本庁舎の試みがうまくいけば、既存の建築を新築しなくても、はるかに早く、安価に

観光資源や市民の新しい共生の場となる空間ができることになる。

東京の渋谷駅周辺で100年に一度と称する大開発が実に長く複雑に進み、驚くような値段のレストランや高級ブランド店が軒を連ねている。そして、こうした店に入れず、暑い街をブラつく若者を見て、誰のための開発なのか？と思うことがある。緑化した方が良いとは言わないが、福岡市の方向性から学ぶことは多いかもしれない。

宮崎県の観光を支えた岩切章太郎は「大地に絵を描く」理念を持って、ヤシの木を植え、ブーゲンビリアの普及に務めたという。我々にも身近な街路樹や植栽を育て、水辺を中心とした街全体の景観を描くことができるのではないかと思った。

(続く)